

日本語と英語の知覚動詞： 理解の過程が語の意味に与える影響

嶋 田 裕 司

Perception Verbs in Japanese and English :
Word Meanings Influenced by the Process of Interpretation

Hiroshi SHIMADA

1. はじめに

語順が語の意味解釈に影響を与えているのではないのか。小論は、この疑問に答えるための試みの一部分をなす。嶋田（2001）は、視覚と聴覚に関わる動詞とその補部の意味解釈について、日本語と英語を比較した。その結果、日本語の「見る」と「聞く」が表わす意味の範囲が、対応する英語の動詞 look, see と ask, listen, hear の意味範囲より広いことを確かめた。ここで問題とする意味範囲とは、人が何かを知覚するために行動を起こし、実際に知覚して、理解し、その事態に対処する行動をとるまでの一連の行為と認識の連鎖のことである。視覚に関する意味範囲は、人が、対象に目を向け、目を通して対象を知覚し、対象が構成する状況を理解し、それについて判断し、さらに適切に対処する行為と認識の連鎖である。日本語の「見る」は、この意味範囲の中のどの部分でも表わすのに対して、英語の look と see は、それぞれ、その一部分を分け持っていて、連鎖の終わりの部分を表わすためには更に別の語を要する。聴覚に関する意味範囲は、相手に情報を求め、音に注意を向け、知覚し、内容を理解し、それを受け入れて行動することである。日本語の「聞く」は、この一連の認識と行動のどの部分にも当てはまるのに対して、英語の ask, listen, hear は連鎖を分割して分け持ち、意味範囲の終わりの部分を表わすためには更に別の語を必要とする。¹ 要するに、行為と認識の連鎖を動詞で表現する場合に、日本語では一語で済ませている範囲を、英語では複数の動詞を当てていることが、視覚と聴覚に関して確かめられた。

このように視覚と聴覚の二つの分野で、日本語の単一動詞に対して、英語では複数の動詞が対応するのはなぜであろうか。もし、このような平行性が偶然生じたのではないとすれば、どのような理由によるのであろうか。この疑問に答えるために、嶋田（2001）は文の理解の過程に関して二つの仮説を立てた。それを整理して述べ直すと、次のようになる。

言葉を理解することは、話すにせよ聞くにせよ、時間の経過の中で行なわれることは明らかである。つまり、我々は言葉を理解する際に、複数の語を時間の経過に従って順に配列している。配列される語は、長期間記憶されていて、必要に応じて時間的広がりの中に表示される。この時間的広がりとは、心の中にある表示空間を構成する次元の一つである。語の意味は記憶の中では抽象的であるが、この表示空間に想起されると、世界に関する知識に一致するように解釈を受ける。この解釈の過程が、言葉を理解する過程であると考えることとする。

以上のことを大前提として、以下に二つの仮説を立てる。

（1） 解釈確定順序の仮説

語の意味は、心の中に表示される順に解釈が確定する。

この仮説によれば、先に表示された語から順に意味の解釈が確定していくので、語に基本的解釈と拡張的解釈という程度差のあることを認めれば、先に表示された語は基本的解釈を与えられやすく、後から表示される語は、先の語の解釈と整合させるために拡張された解釈を与えられやすくなる。つまり、後の語の解釈は、先の語の解釈の影響を受けることになる。

もう一つの仮説は、句の内部における情報の分布に関するものである。動詞とその補部の意味を合成して、句としての解釈を決定する際に、先に解釈を受ける語の情報量が多いほど、後の語の解釈の範囲が狭まり、従って、句の解釈を確定するのが容易になると思われる。そこで、解釈の確定を容易にして、伝達の効率を高めるための次のような原則があると仮定する。

(2) 句の情報分布の仮説

句の内部では、先に表示される語の情報量を増やす力がはたらく。

この仮説によれば、英語のように動詞がその補部より先に表示される言語では、動詞の情報量が多くなり、極端な場合には、句の意味が全て動詞に組み込まれることもあることになる。逆に日本語のように、補部が動詞より先に現れる言語では、補部に多くの情報が組み込まれることになる。ただし、動詞が持つ情報量がどんなに少なくなろうとも、動詞が無くなることはない。動詞が無くては、動詞句は構成できない。

上の解釈確定順序の仮説(1)と、句の情報分布の仮説(2)が予測することは、句の内部で先に表示される語は、基本的な解釈を受け、しかも、情報量が多くなるということである。逆に、後から表示される語は、柔軟に拡張した解釈を受け、しかも、情報量が少なくなるということである。日本語について言えば、動詞は、補部の意味が確定した後から現れるので、拡張した解釈を受けやすく情報量が少なくなる。それに対して、英語の動詞は、補部より先に現れるので、基本的な解釈を受けやすく情報量が多くなる。この予測は、先に記した日英語の動詞の意味範囲の対応関係に一致していると考えることができる。動詞「見る」と「聞く」の意味範囲が広いのは、補部として先に解釈される情報量が多いため、動詞自体はそれに合わせて拡張した解釈を受けるからである。また、その意味範囲を英語の動詞 look, see と ask, listen, hear が分割するのは、英語では動詞が先に表示されるために、基本的な解釈を受けやすく、しかも、情報量が多くなるからである。

上の二つの仮説による説明は、視覚と聴覚に関する動詞の意味範囲に限らず、他の意味分野における動詞の意味範囲にも当てはまるはずである。他の意味分野に関しても、上の仮説は維持できるのであろうか。

小論の目的は、嶋田(2001)が行なった視覚と聴覚に関する動詞の比較を補うため、さらに味覚、嗅覚、触覚に関わる動詞の意味範囲とその補部の特徴を比較することにある。五感のうち、視覚と聴覚に関わる言語表現の豊かさに比べれば、味覚、嗅覚、触覚に関する表現は限られている。² しかし、ここでも、視覚と聴覚におけるのと同様の結果が得られることが明らかになる。すなわち、味覚、嗅覚、触覚の分野においても、日本語の動詞の意味範囲は、対応する英語の動詞の意味範囲より広く、したがって、補部の表現への依存度が高い。このことは、上述の仮定が予想することに一致している。

2. 知覚動詞とその補部

味覚、嗅覚、触覚の順に日英語の動詞とその補部を比較していこう。ここでの目的は、日本語の動詞の方が英語の動詞より意味の範囲が広いことを示すことである。意味の範囲とは、上で述べたように、行為と認識の連鎖のことである。人が何かを知覚する際には、もしそれが意図的であれば、

初めに準備動作を行ない、対象に注意を向けて知覚し、さらに、より深い認識をして新たな行動を行なう。人が行なうこのような行為と認識の流れのどの部分が動詞によって表わされているのかという問題を、以下で考察する。日本語では、動作と知覚を同一の形態で表現しているのに対して、英語では、その二つを別の形態で表現していることが、特に嗅覚と触覚の場合に明らかになる。日本語でその二つを区別するためには、補部に別の語を加える必要がある。

2. 1. 味覚：「味わう」 taste

はじめに、味覚に関する動詞「味わう」と taste を比べてみよう。英語の taste は、人が食物の味を知覚することに意味が限定されているのに対して、日本語の「味わう」は、味の知覚に加えて、その味を楽しむことをも表す。初めに「味わう」の使用例を観察しよう。「味わう」は、(3)のように目的語として「いちご」「そば」などの食物を表す表現をとる。また、(4)のように「じっくり」「たっぷり」「存分に」などの副詞を伴うことがある。

- (3) a. 野山のいちごを味わってみよう。³
 b. 地元産そばを味わってみませんか。
 c. …まろやかなワインを味わった。
- (4) a. …アツアツの粥から米の味と香りをじっくり味わったのでしょう。
 b. …手作り料理をたっぷり味わった後は…。
 c. …美酒、銘酒を存分に味わってください。

これらの副詞が表す態度、食物の量、満足度の高さは、「味わう」という動詞の意味範囲が、食物の味を認識することにとどまらず、味を楽しむことにまで広がっていることを示している。

英語の taste には、味を知覚する意味はあるけれども、その味を楽しむという部分が欠けていることを次の例(5)は示唆している。(楽しむことをあらわすには、enjoy, savor を使う必要がある。)

(5a) は食物の味見をする文脈であり、(5b) は strange white flakes が何であるのか確かめる文脈である。ここでは、taste に味を楽しむ意味が込められているとは思われない。したがって、taste は、日本語の「味わう」よりは「味を見る」という句に近い意味を表すと考えられる。

- (5) a. Please taste the soup and tell me if it needs more salt. OALD5
 b. Soon strange white flakes had fallen from the sky. Amok had tasted them to see if they were coconut.

また、taste には、carefully, cautiously, suspiciously のような副詞が伴うことがある。これらの副詞は、注意深さや疑い深さを表すので、taste の意味が味の判断に限られていて、味を楽しむことは含まないことを示していると思われる。

- (6) a. …he carefully tasted the porridge. But it was warmed just right.
 b. Sergei cautiously tasted the white substance in the mug, …
 c. Joe filled his mouth and tasted it suspiciously.

taste を修飾するこれらの副詞と、「味わう」を修飾する「じっくり」「たっぷり」「存分に」を比較してみると、二つの動詞の意味の相違が明らかになる。taste の意味は、味覚によって味を判断する

ことに限られるが、「味わう」の意味は、味覚を通して楽しむことにまで広がっている。図式的に表わせば、二つの動詞の範囲は次のようになる。

- (7) <食物の味を認識し> <その味を楽しむ>

「味わう」：=====

taste：=====

さて、次にこの二つの動詞の目的語に目を向けよう。taste と「味わう」は、目的語の種類においても微妙に異なっている。taste の目的語は普通は食物であるのに対して、「味わう」の目的語には、(8) のように味自体を表す「旨味」「おいしさ」「味」などがなることがある。

- (8) a. …新鮮なメロンの旨味を味わった時…。
b. …アボガドのおいしさを味わったのがはじめてとは…。
c. 本物の味を味わって下さい。

このような名詞は、たとえ次の例のように省略しても、あまり不自然には感じられないので、目的語と動詞の関係を、冗長ではあるが、滑らかにする機能を持っていると思われる。

- (9) a. …新鮮なメロンを味わった時…。
b. …アボガドを味わったのがはじめてとは…。
c. 本物を味わって下さい。

対照的に、taste の場合には、目的語に食物を表す表現をとることが普通であり、味の表現をとることはまれである。つまり、模式的に表わすと、次の (10a-b) の表現は普通に用いられるが、(10c) のような表現は見当たらない。

- (10) a. I tasted the wine.
b. I tasted the delicious wine.
c. *I tasted the deliciousness of the wine.

ただし、比喩的表現になると、目的語として deliciousness, sweetness, bitterness などの味の表現が現れることがある。次の (11)-(13) の a. の例は、比喩表現であり、God's grace, success, defeat という舌では知覚できない抽象的概念の味について語っている。b. はそれらと対照するための文字通りの意味の表現である。

- (11) a. …since I have tasted the deliciousness of God's grace, I wish to share it with everyone. …
b. Once you've tasted this delicious fruit, you'll know why folks wait patiently... all year to enjoy their next batch.
(12) a. I saw learning as a joy only after I benefitted from it and tasted the sweetness of success.
b. Before that day no one yet has tasted the sweet fruit.

- (13) a. It was the same when Pearl Harbor was struck, and for months afterwards while we tasted the bitterness of defeat.
 b. If you've ever tasted a bitter almond, you understand how only one can have a serious effect.

このように、英語では、動詞 taste とその対象の間に比喩的な関係が生じるときに、言わば、その間を取り持つために、味を表わす名詞が生じることがある。

以上のように二つの動詞の目的語を比べてみると、「味わう」の方が taste より広い範囲の目的語をとることがわかる。「味わう」は食物のみならず、その味を表わす目的語をとる。食物を食べればその味を知覚するのであるから、この二つは隣接する。すなわちメトニミーの関係にある。「本物を味わう」と言って済ますこともできるにもかかわらず、「本物の味を味わう」と言うのは、句の内部で情報を先に表出しようとする圧力が働くからであろう。それに対して、taste は、メタファーが関与する場合を除けば、一般に食物のみを目的語にする。このことも句の内部では情報を出来るだけ先に表出するという原則に従っている。動詞 taste が目的語より先に来るので、動詞の中に「味」の意味が込められていれば、わざわざ目的語としてそれを表出する必要はなくなる。ただし、(11)–(13)の a. のようなメタファーの場合には、別の説明が必要となるが、この問題は今後の課題として残す。

2. 2. 嗅覚：「かぐ」 sniff, smell

次に、嗅覚に関わる動詞「かぐ」の意味の範囲について考えよう。「かぐ」は、においを知覚するために努力をすることを表す文脈で用いることもあれば、思いがけなくにおいに気付く文脈で用いることもある。次の例からは、そのような努力あるいは注意力の差を読み取ることができる。

- (14) a. その犬はクンクンと私の手のにおいを嗅いだ。
 b. 信治郎は…煙草の銘柄を、目をつぶって匂いをかいただけで当てたという。
 c. 男が脇を通るとき、賢三はツンとするようなタバコの臭いを嗅いだ。

(14a) では「クンクンと」によって鼻を使っている様子が描かれており、(14b) では全体の記述から、銘柄を当てるために注意力を集中していることが推測できる。それに対して、(14c) では、意図せずに臭いに気付いたという読みが可能である。したがって、「かぐ」は、様態表現の有無、注意力の程度に関わらず用いられると言えよう。

「かぐ」に対応する英語の動詞としては、sniff, smell がある。sniff は鼻から空気を吸い込むことであるが、その際、空気が鼻孔に触れる音がする。OALD5, COBUILD によれば、その目的は、(15) のように、においをかぐためのみに限らず、(16a) のように鼻水をすするため、あるいは (16b) のように言葉で軽蔑を表すための場合などがあり、多様である。

- (15) a. Clawdus sniffed the ground carefully and moved slowly in a zigzag pattern, ...
 b. I...sniffed repeatedly, hoping to identify the scent.
 (16) a. They all had colds and kept sniffing and sneezing. OALD5
 b. 'Tourists!' she sniffed. COBUILD

そこで、sniff の意味の中心は、動作の目的ではなく、音を立てるという様態にあると考えることにする。したがって、においをかぐことは、sniff が表す動作に隣接する目的の一つということになり、

その意味は文脈や場面から推測されるということになる。

sniff が動作の様態に重点があるのに対して、smell は嗅覚による知覚そのものに意味の中心がある。日本語の「かぐ」と同様に、知覚に際して対象に注意を向けている場合もあれば、思いがけず知覚する場合もある。(17)では、意図的な知覚が描かれていることが、主体による注意力の制御を表す *carefully, cautiously* の存在によって推測できる。また、(18)では、においを予期していない解釈が可能である。

- (17) a. When two dogs meet they carefully smell each other : . . .
 b. How to check for propane : Carefully smell at floor level and in low spots.
 c. With great trepidation he goes right up and cautiously smelled the Lion's big open mouth.
- (18) a. . . when I went behind my showcases. . . , I smelled a very slight odor of smoke.
 b. I walked through another door. This time I smelled candles.

「かぐ」と sniff, smell は、目的語に関して異なっている。「かぐ」は、その目的語として匂いの源を表す語句を直接とることは少なく、普通は「におい」「かおり」などをとる。たとえば、「花をかぐ」とは言わずに、「花のにおいをかぐ」と言う方が自然に感じられる。この点も日本語の表現を長くする要因になっている。英語で The dog sniffed. と言うところを、日本語では「犬はクンクンとにおいをかいだ」ということになる。⁴

動詞の意味の範囲を比較するために図式的に表すと、次のようになる。

- (19) <鼻から空気を吸い込む> <嗅覚によって知覚する>
 「かぐ」 : _____
 sniff : _____
 smell : _____

「かぐ」は、空気を吸い込んでから知覚するまでの動作と知覚を切れ目なく表しうるのに対して、英語では、sniff が動作に、smell が知覚に意味の中心を置いて、「かぐ」の範囲を分け持っている。日本語で意味の範囲のどこかに焦点を合わせるためには、別の語を補う必要がある。

2. 3. 触覚：「触れる」「さわる」touch, feel

触覚によって物の存在を感じ取ろうとすると、その物に触れないわけにはいかない。つまり、我々が物に接触することと、触覚によって知覚することは常に隣接している。そのため、その二つを区別することは難しい。接触と触覚に関わりのある語は、日本語には「触れる」「さわる」、英語には touch, feel がある。

初めに「触れる」について考えよう。「触れる」は、ある物が別の物に接触することを表す。次の(20)のように人や身体の一部が物に接触する場合のみならず、(21)のように「特に皮膚感覚を伴わない」物と物の接触の場合にも用いられる(森田(1989:1012))。

- (20) a. …李敢は鹿の角に触れて死んだ…。
 b. 奥さんは…茶碗に手を触れなかった。
 c. …彼女の髪が僕の頬に触れた。

- (21) a. クレーンの先端が電線に触れてショートした。 森田 (1989)
 b. …船底にじやりじやりと砂の触れる音が伝わった。
 c. …カチャカチャ皿小鉢の触れ合う音をさせながら、

さらに、「触れる」は、手を触れることのできない抽象的な対象にまで用いることができる。次の例では、「こと」「問題」「考え方」「魂」を対象にしている。

- (22) a. …駒子が…葉子のことに一言も触れないのは、なぜであろうか。
 b. …頭を使う込み入った問題には触れませんでした。
 c. …今まで考えもしなかった考え方に触れた苦痛から醒めなかった。
 d. 学校ってものは…。先生の魂と生徒の魂の触れあう道場だ。

ここまでの観察を一般化すると、「触れる」は、ある物が別の物に接触することを表していて、その物が具体物であるのか抽象的概念であるのかは問わないと言える。したがって、「人が物に手を触れる」ことは、「触れる」の意味の特定の場合であることになり、接触の意味はあるけれども、それによる皮膚からの知覚の意味はないと考えてよいであろう。

「触れる」が、接触を表すのみで皮膚からの知覚は表さないのであれば、「AがBに触れる」という場合に、接触によってAもBもどちらも影響を受けないのかという疑問が生じる。それに対する答えは、Aだけが影響を受けるということになろう。次の例のように、「が」格で表される対象が影響を受ける文脈で「触れる」が用いられることが一般的であるように思われる。

- (23) a. これが油が空気に触れて酸化したものなんです。
 b. …尼が山の神の怒りに触れてころがり落ちた…。
 c. 校長…が、人々の優しさに触れ感動する場面。

ここに挙げた例では、「触れ(て)」の後に来る動詞が、「が」格を伴う名詞句の対象の変化を表している。つまり、(23a)では、酸化したのは油であり、(23b)では、ころがり落ちたのは尼である。(この点は、後に(27)の「さわる」と比較する。)

次に、「さわる」について考えよう。「さわる」は、森田(1989:1014)によれば、「皮膚表面における触覚的刺激を受ける行為・作用」である。したがって、刺激を受ける主体である人を必要とするため、「さわる」が物と物の作用を表すことはない。この点で、「さわる」は「触れる」とは異なっている。たとえば、次の(24)のように、刺激を知覚する人物を想定する場合は「さわる」が許されるが、上の(21)における物と物の接触を表す「触れる」を「さわる」に替えて、(25)のように表現することはできない。

- (24) a. 良人は…妻君の肩へ触ってみた。
 b. 私は…指先でそれに触った。
 c. 彼女は…私の耳たぶに触った。
 (25) a. *クレーンの先端が電線にさわってショートした。
 b. *…船底にじやりじやりと砂のさわる音が伝わった。
 c. *…カチャカチャ皿小鉢のさわり合う音をさせながら、

したがって、「さわる」ことが成立するためには、接触することと、それによって知覚することの両方が必要である。

接触することと知覚することが、「さわる」を含む文によってどのように表わされるのか、上の例(24)を参考にして考えてみよう。「さわる」が表わす接触の典型的な事例は、ある人物が意図的に自分の手を対象の表面に置く動作である。動作主は「は」または「が」によって記され、「手」は表出することもしないこともあり、より詳しく「指先」などとして表れることもある。たとえば、「私は…指先でそれに触った」という例では、「私」が動作主であり、その人物の意図的動作が表わされている。

「さわる」のもう一方の要素である知覚とは、人が触覚によって対象の存在やその性質を知ることである。触覚を経験する人物(知覚者)は、言語表現の中の格助詞によって指定されることはない。おそらく、知覚者を決定する要素は、「は」「が」「に」などの格助詞ではなく、話者が表現中の人物の誰に自己を重ねているかであろう。知覚者という役割は、話し手(書き手)が自らの立場として共感する人物に割り当てられ、典型的には、「私」として表出し、表出されない場合や一人称以外の人物に割り当てられる場合もある。上の例(24)を再び用いれば、「良人は…妻君の肩へ触ってみた」では、「良人」が知覚者と解釈できる。また、「私は…指先でそれに触った」と「彼女は…私の耳たぶに触った」においては、表出される位置は異なるが、共に「私」が知覚者と解釈できる。この2例は、知覚者の解釈が格助詞には依存しないことを示していることに注意しよう。

「さわる」は、接触と知覚の両方を表わすが、どちらに重点を置くのかは、補部の表現に左右される。とくに、接触に関しては、上で見たように、人物の意図的動作全体が描かれることもあれば、次のように、身体の部分に焦点を合わせることもあり、さらには、何らかの物が接触することを表わす場合もある。

- (26) a. …砂金の袋にけつまずいて、思わず手が婆さんの膝にさわった…。
 b. 其度に自分の頬がお松の鬢の毛や頬へさわるのであった。
 c. 母のちぢれた後れ毛が私の頬にさわったとき、
 d. 彼はきれいな花ぶさがほおにさわった時、ふと伊勢屋を思いだした。
 e. 肩に何かさわったものがある。眼を開くと、社長が横に立っていた。

(26a)では、「手が」さわるのであって、「手で」さわるのではない。すなわち、非意図的動作が描かれている。また、(26b)(26c)では身体部分が接触し、(26d)(26e)では物が身体に接触する。このように、目に見える動きが人物の意図的動作から物体の接触へと簡略化するにつれて、相対的に知覚の意味が浮かび上がってくる。「良人は…妻君の肩へ触ってみた」よりは、「肩に何かさわったものがある」の方が、知覚の意味が前景化している。

おそらく、この前景化した知覚の意味に、メタファーによって結ばれるのが「癪にさわる」「御機嫌にさわる」などの用法であろう。

- (27) a. …俺は今まであの野郎に威張られたのが癪にさわって、
 b. …御機嫌に障つたらばゆるして下され、
 c. ふだん、やりつけない事をすると直ぐ身体に障る…

(26d)(26e)で前景化した<皮膚感覚>と<それに対する刺激>が、(27)が例示する領域では<心身の健全性>と<それに対する阻害>に対応していると考えられる。ついでながら、この例では、

「さわる」と「触れる」のもう一つの相違が明らかになる。「癢にさわる」「御機嫌にさわる」では、影響を受けるのは、「に」格を伴う「癢」「御機嫌」であるのに対して、「油が空気に触れて」または「尼が山の神の怒りに触れて」影響を受けるのは「が」格が付く「油」「尼」である。すなわち、「AがBにさわる」ではBが、「AがBに触れる」ではAが影響を受ける。

上の実例は、場面を想像しやすいけれども不揃いなので、次に作例によって「さわる」の意味範囲を模式的に示してみる。(28)は、動作主と知覚者が存在する場合、(29)は知覚者のみで、動作主が存在しない場合である。

- (28) a. 太郎は指先で花子の肩にさわった。
 b. 私は指先で花子の肩にさわった。
 c. 太郎は指先で私の肩にさわった。
 (29) a. 私の指先が花子の肩にさわった。
 b. 木の枝が私の肩にさわった。
 c. 太郎の態度が気にさわった。

(28) (29) の例をたどると、「さわる」によって描かれる場面は、動作主の意図的動作とそれに伴う皮膚感覚から、動作主の無い接触と皮膚感覚へ、さらに心理的領域での知覚へと変化する。

要するに、日本語では触覚のみを表わす動詞は存在しない。「触れる」は物が別のものに接触することを表わすための一般的な語であり、「さわる」は、接触と知覚の両方を表わす語である。

さて、次に英語の touch, feel に目を向けよう。日本語の「さわる」とは対照的に、英語では、接触を touch で表し、触覚による知覚を feel で表すことによって、この二つを区別している。OALD5 の定義と例文は、この違いを明瞭に示しているので、関係する部分を次に引用する。

- (30) touch: to put one's hand or fingers onto sb/sth
 a. Don't touch that dish—it's very hot! OALD5
 b. He touched her gently on the cheek. OALD5
 (31) feel: to explore or perceive sth by touching it or by holding it in the hands
 a. Can you feel the bump on my head? OALD5
 b. Can you tell what this is by feeling it? OALD5

touch は、手や指を対象に接触させる動作である。feel は、その動作によって対象の性質を知覚することである。触覚は、接触という準備動作の後から生じる知覚であると考えて、図式的に二つの動詞の意味範囲を表してみよう。

- (32) <物に手を接触させ> <触覚によって物の性質を感じる>
 touch: _____
 feel: _____

feel が表わす知覚は、さらに細分すれば、手を用いる場合と用いない場合があり、また、意図性にも程度の差がある。

- (33) a. ... touch a desk or a tree and be aware of what you feel. ...

- b. Also touch a loose part of the clothing you are wearing so that your body beneath it does not feel you touching it.
- c. ...the old man shoved his hand to his pants pocket. The transmitter, the size of a matchbox lay there safely. The old fingers carefully felt the plastic cover and found the signaling button.

(33a) の feel は手による知覚であり、(33b) の feel は手以外の知覚である。(これらの feel に対応する日本語は、「感じる」であろう。) また、(33c) の felt には意図的な手の動きが込められていることが、文脈とくに carefully の存在によって推測される。

もちろん、touch と feel には、ここで比べた意義しかないのではない。それぞれが独自の意味の広がりを持っているので、そのうちの幾つかをここで確認しておくことにする。まず touch であるが、上の (30) に示した意味、すなわち、人が手を物に触れる動作のイメージが、この動詞の基本的意義であると仮定しよう。次に、そのイメージの中の接触部分に焦点を合わせて人の姿を背景化すれば、二つの物が接触するイメージが得られる。これが、一般にある物が別の物に接触することを表すときの touch の意義であることになる。

- (34) a. One of the branches was just touching the water. OALD5
- b. Don't let your coat touch the wall—the paint's still wet. OALD5

もう一つの意義は、メタファーによって、すなわち、この接触のイメージを心理的領域に写像することによって得られる。物質的領域において物が物に接触する図式(スキーマ)を心理的領域に写像し、それぞれの物に対応する実体を、<こと>と<心>であると仮定しよう。すると、心理的領域で、<こと>が<心>に接触する図式が派生する。心に接触することは、心に影響を与えることである。

- (35) a. His harsh words had obviously touched her although she tried not to show it. LDCE3
- b. Politics didn't touch me an awful lot those days. LDCE3

ここまで述べた touch の三つの意義の関係を図式的にまとめると (36) のようになる。身体的接触から、焦点化とメタファーを通して意味が拡張する。矢印は、意味拡張の方向を表わす。

- (36) touch: <手で物に接触> → <物が物に接触> → <ことが心に接触>

feel の意味の広がりに関しては、feel が「その他の知覚」とでも呼ぶ役割を果たしていることに注意しよう。つまり、feel には、手の触覚に限らず、心身で知覚することを広く表す働きがある。

- (37) a. We all felt the earthquake tremors. OALD5
- b. Can you feel the tension in this room? OALD5
- c. He seemed to feel no remorse at all. OALD5

したがって、feel には、触覚の意味に加えて、その他の知覚の意味もあることになるが、実はこの二

つは区別されないこともありうる。つまり、feel が表わしているのは、視覚・聴覚・嗅覚・味覚に含まれない残りの知覚という可能性である。

ここまで調べてきた日本語と英語の動詞を、接触と触覚に関してもう一度比較してみよう。touch と feel の図式 (32) に日本語の「触れる」「さわる」を入れると次のようになる。

- (38) <物に手を接触させ><触覚によって物の性質を感じる>
- 「触れる」：=====
- 「さわる」：=====
- touch：=====
- feel：=====

接触に関しては、「触れる」と touch が、その部分に限られる点で似ている。それに対して、触覚の場合には、日本語にも英語にも専用の語があるわけではない。触覚は、日本語では「さわる」によって接触のメトニミーとして表わされ、英語では feel によってその他の知覚の一部分として表わされる。言い換えれば、どちらの言語においても触覚による知覚は、独自の地位を与えられてはいない。

しかし、(38) の図式を嗅覚の図式 (19) と比べてみると、日本語と英語の動詞の相違に一貫性が見いだされる。日本語では動作と知覚を一つの動詞で表わすのに対して、英語では別の語形で表現する。嗅覚の場合は、「かぐ」に対して sniff, smell があるように、触覚の場合には、「さわる」に対して、touch, feel がある。日本語では補部によって区別する動作と知覚を、英語では動詞の語形によって区別している。

3. まとめ

日本語と英語における味覚、嗅覚、触覚に関わる動詞を順に比較してきた。それぞれの意味分野において、日本語の動詞の方が英語の動詞に比べて意味範囲が広いことを確かめた。味覚の動詞「味わう」と taste では、「味わう」が<食物の味を認識して><その味を楽しむ>ことまでの広がりを持つものに対して、taste は味の認識の意味しか持たない。また、嗅覚を表わす「かぐ」は、においを知覚するための準備動作から実際の知覚までの範囲を表わすものに対して、sniff と smell は準備動作の部分と実際の知覚の部分に分け持っている。同様に、触覚に関わる「さわる」は、対象に接触する動作と触覚による知覚を併せ持つものに対して、touch と feel は接触と触覚を分けている。

特に嗅覚と触覚については、英語の動詞が意味分野を分割する仕方が同じになっていることに注目しよう。sniff と smell、touch と feel は、それぞれ準備動作と実際の知覚を区別している。このような意味分野の分割は、視覚と聴覚の場合にも観察できる。すなわち、look と see、listen と hear は、それぞれ準備動作と知覚を分けている (嶋田 (2001) 参照)。したがって、味覚を別にして一般化を行なうと、知覚の準備動作と実際の知覚は、日本語では一語で表わされるのに対して、英語では語形による区別があるということになる。

ここで確かめた一般性は、小論のはじめに述べた仮説を支持している。この一般性は、特に、解釈確定順序の仮定と句の情報分布の仮定の帰結と考えることができる。解釈確定順序の仮定とは、文の意味解釈は、時間的広がりの中で語が表示される順に決定されていくという考え方である。したがって、句の意味を合成する際には、先に現れた語は典型的な意味に近い解釈が与えられ、後から現れる語は先の解釈に矛盾しないように柔軟な解釈が与えられることになる。日本語の動詞は、補部の後から現れるので柔軟に解釈されるため、意味範囲が広がる。一方、句の情報分布の仮定とは、句の内部では解釈の確定を容易にするためにできるだけ多くの情報を先に表示しようとする

力が働くというものである。したがって、英語の動詞は、補部より先に現れるので多くの情報を与えられ、結果的に意味範囲が狭くなる。また、日本語の補部も同様に情報量が多くなる。

以上、知覚動詞の意味の広がり方を考察したが、ここで触れた問題は、語順と語の意味に関わる問題の一部分にすぎない。第一に、ここで取り上げた意味の広がりとは、知覚に関わる行為と認識の連鎖のことである。言い換えれば、メトニミーによる広がりである。おそらく、語順と語の意味の関係をさらに探究するためには、メタファーによる意味の拡張についても考える必要がある。第二に、考察の範囲は、動詞とその補部の関係に限られている。文の主語または話題という概念に言及することは避けてきた。これは問題を単純化して明確にする効果はあるが、句より大きい単位では何が起きているのかを考え始めれば、たとえば英語の主語と動詞の意味解釈の確定について当然考えることになる。今後、語順と語の意味について考え続けるためには、これら二つの方向を考慮する必要がある。

注

- 1 ここに示唆した「聞く」の意味範囲の内部構造は、嶋田(2001)が示したものと一部異なっている。ここで示したように ask に対応する<相手に情報を求める>部分が連鎖の最初にあると考える方が適切だと思われる。
- 2 山梨(2000:127-132)は、英語の視覚表現が、他の知覚表現に比べて、意味の拡張を起こしやすいことを指摘している。
- 3 以下で出典の示されていない用例は、インターネット上のページと『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』から引用したものである。後者からの引用例は、触覚に関するものに限られる。また、作例を示す場合には、その都度明記する。
- 4 「花のおいをかぐ」に類する現象としては、「雨の音を聞く」「人の姿を見る」などがある。嶋田(2000, 2001)を参照。

参考文献

嶋田裕司(2000)『『姿』の出没—日本語と英語の視覚動詞の補部—』『群馬県立女子大学英語英米文学研究』第2号。

嶋田裕司(2001)「語順と語の多義性」『群馬県立女子大学紀要』第22号(25)-(38)。

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店。

山梨正明(2000)『認知言語学原理』くろしお出版。

『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』(1995)新潮社。

COBUILD=Collins COBUILD English Language Dictionary (1995) HarperCollins Publishers Ltd.

LDCE3=Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition (1995) Longman Group Ltd, Essex.

OALD5=Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, Fifth Edition (1995), Oxford University Press, Oxford.